我が家には正体不明の生物がいる

白龍閣下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家には正体不明の生物がいる

【Ｎコード】

Ｎ８９１３Ｔ

【作者名】

白龍閣下

【あらすじ】

見た目の割にごく平凡な高校生である草壁那由多は、ある日段ボール箱に入った女の子を拾う。だがその女の子には、なんと触手が生えていて……。展開も糞もない、そこにあるのは触手だけの、ゆるゆる掌編コメディ！

第0話　布団

暑い。
朝起きて最初に思ったのは、そんな事だった。
昨夜は確かに涼しかったし、掛け布団を一枚羽織っておいたのだが、朝起きたらそれは毛布にジョブチェンジしてしまっていた。
今は夏休みの最中なのだから、間違ってもクローゼットから毛布を引っ張り出してくることなどあるまい。
ジョブチェンジとは言ったが、まさか本当に掛け布団が羽毛布団に変質してしまったわけではないだろう。
まぁなんにせよ、これをずっと掛けている道理などないのだから、さっさとこの布団を引っぺがせばいいのだが。
いいのだが……いかんせん離れてくれない。
背中に腕まで回され、今の私はさながらこいつの抱き枕だ。あべこべにもほどがある。
「……ふむ」
私はもう一度、その毛布を見回した。
まるで外に出ていると思えない真っ白な肌。
着ているというよりは着られていると言ったほうが正しいであろう、ジャージにくるまれた腕。
思わず羽毛布団と見間違えてしまうような長く淡い髪。
そしてその髪の中に紛れている異質な物――触手。
「……」
とりあえず私はそれを、引っ張ってみることにした。
「――――ッ！」
文字通り声にならない叫びが上がった。
「寒かったのだ」
朝から私にしがみつき、眠りながらにして私を蒸し焼きにして殺

そうとした少女――菜摘は、ベッドの上に体操座りしその薄い胸に枕を抱えながら、見た目十二歳ほどの幼い顔を膨らませながら弁明を始めた。
「夏だからきっと夜も暖かいんだろうと思ったらそうでもなかった。となるともうなゆたの布団にもぐりこむしかないじゃないか」
「……どーしてそーなる」
半眼で睨みつけると、菜摘は更に膨れっ面になった。
ちなみになゆたというのは私の事で、草壁那由多という名前なのだが、まぁ家系がどうだのとかそんな設定もない、極めて普通の名前負けした女子高生だ。
ただ、両親がいない間にこんな正体不明の触手生物を連れ込んでしまっていたりはするのだが。
「うるさい、なゆたが悪いんだぞ！　自分だけ暖かいベッドで寝てさ、布団に寝かされるわたしの身にもなれ！」
「黙れ居候。本来なら段ボール箱で野宿しているであろう所をわざわざ拾ってやったんだからな」
「うー……」
それで菜摘は押し黙った。理解は出来ても納得はいかないらしく、触手をピクピクと動かしてはいるが。
「……ねえ」
「ん？」
ふと気になったことがあって、私はそれを聞いてみた。
「その触手、どうなってんの？」
「触手は触手だ。なゆたにはないだろう？」
それもそうか。確かにそれを言葉にして説明するのは難しいだろう。
「じゃあそれ、千切っていい？」
「やめろ！　どうしてそうなるのだ！」
「いや……千切れるの？」
「まあな。けど痛いのだ」

「ふーん」
千切れるのはないわけじゃないのか、などと思いつつ、彼女の髪を撫でてみる。本当にこういう時正直だなぁ。仮に私が本当に好奇心旺盛な人間だったら、いつあんたの触手を引っこ抜こうとするかわかったもんじゃないのに。
『プチッ』
プチッ……？
「うわーん！　もげた――――！」
どうやらそれは、触手がもげた音だったようだ――って、そんな冷静に観察してる場合じゃないか！
「なゆた――っ！」
「私じゃない！　私何もしてないから！」
「なゆた――っ！　もげた――っ！」
「そんな私の名前を動詞みたいに使われても困るから！　静かにしろ！」
ちなみにこの後、菜摘をあやすのに大変長い時を要したのは言うまでもない。

まあ、とにかく。
これはそんな正体不明との触手生物との、なんともない交流を描いた話だ。

第1話　雨

駈ける。駈ける。駈ける。ただひたすら、降り注ぐ雨から逃げるように私は走った。当然、足元を見て水溜りを回避しながら進むことも忘れない。

左の肩には旅行とかに持ってくようなでかいバッグ、右にはショルダーバッグ。それで頭にはバスタオルだ。

ああ、むかつく。

雨。一発一発のダメージは小さくとも、それを数十回毎秒で全身に受けるわけだ。ちなみにひたすら顔に水滴を垂らし続けるってのは非常にきつい拷問らしい。

……いや、まぁ腹が立ってくるのはそれだけの事じゃなくて。

一昨日から四泊三日の水泳部の合宿に行ってて、今その帰り道をダッシュで突き進んでいるわけなんだけれども。

……ええと、一昨日から四泊三日の合宿っていうのは誤植とかそういうのじゃなくて。

台風が来るらしい。今でもこんな鞄の中が心配になってくるような大雨だけど、もうじき更に酷くなるからさっさと帰れだって。

かくして我が部の四泊三日の夏合宿は三日目にして中断されたというわけだ。

別に水泳の練習ができなかったのが嫌だったなんてことはない。そんなキャラだと思われてしまうのは心外だし。

この辺は運動部をやってる人間なら誰しも共感できることだとは思うけど、私たちにとって合宿ってのは練習うんぬんってのとはほぼ関係ないと言っていい。合宿とはあくまで合同宿泊であって、部屋とかで色々友人とかと普段できないような話をしたりー、とか持ってきたゲームをしたりー、とか。ああなんと素晴らしいことか。こういったゆるい時間こそ価値があるように思う。あらためていうけど水泳なんて二の次なんですよ。だって女の子だもの。

がしかしっ！

……。

……ごめん、なんかごめん。

ただ本当、思わずバカヤロー！と叫びたくなるような忌々しい台風がやってきたせいでわくわくイベントは打ち切りになってしまった。当然だけど本当に叫ぶようなことはしない。この深くも狭い怒りをあらぬ場所にぶつけたところでどうにもならないし、そんな事をやってしまえば私の外聞は無駄な犠牲となって消えてしまうだろう。

だからただ家を目指し走り、出来るだけ雨をよけながら、そして家を目指し走る。それだけの単純な作業だ。

ちなみに両親はというと、せっかく合宿だからと可愛い一人娘である私を置いて今旅行に行ってしまっている。三重とかいう何とともここから近いのか遠いのか分からない場所だとか。まぁいい、帰ってきたらたっぷりとお土産の赤福をいただくことにしよう。

そんなことを考えながら走っていると、ふと視界に奇妙なものが入った。

道路の端、小学校高学年くらいの見た目の女の子が、なぜか段ボールの中で体操座りをしていた。

さぁ……厄介な場面に出くわしたものだ。

その女の子はこんな雨の中で白の半袖に青の半ズボンという非常に薄着な恰好だった。そしてオレンジ色の地面に届くほど長い髪、そして真っ白な肌と、とても日本人とは思えない風貌だ。捨て子かと思うがそれにしては表情に暗さが見えない。単なるアホなのか、泣く事すら許されない過酷な状況なのか、それとも非常に手の込んだ悪戯なのか――三つ目は一つ目に含まれるのかな？

まぁ考えている余裕はない。先人の言葉である、考えるより先にやれというはよく言ったもので、その言葉に従って私は、

彼女の横を、駆け抜けた。

結局無難な結論に落ち着いた。これでいいのかという思いが頭がよぎったが、これでいいのだ。これは私に頼らなかったあいつが悪いということで……

と思ったら突然頭が軽くなったような気がした。頭に直接雨が降り注ぐ。どうやらタオルを取られてしまったみたいだ。そして私からバスタオルを奪い取った彼女はそれを不器用ながら自分の頭に乗せ、「ふーん」などと言いながらまた手に取った。そしてこちらを見上げてその純粋そうな瞳をこっちに向け、彼女はこう叫んだ。

「おまえ、変な格好してるなっ！」

そしてその言葉に、私も心の底から応える。

「あんたが言えたことかっ！！」

そんな彼女との、とてもシュールなファーストコンタクトだった。

第2話　シャワー

ショルダーバッグの外側にあるポケットから家の鍵を取り出す。さっきから我が家を見上げて「おお！　ここがなゆたの家なのだな！」と無駄にテンション高く跳ねているのが約一名いるが、蹴っても蹴っても大したダメージになっていないようなので諦めた。一応手加減（足加減？）をしてはいるが、それにしてもおかしい。なにしろあいつの見た目はせいぜい小学校高学年くらいなのだ。……もしかすると、家庭の事情か何かで蹴られるのに感覚がマヒしまったのだろうか？　そう考えると私は悪いことをしたのかもしれない。

鍵を開けて家の中に入る。それに気づいた彼女は私をのけて真っ先にドアを開けた。

「おお！　ここがなゆたの家なのだな！」

それさっきも聞いたよ。

「って勝手に上がるな！　タオル持ってくるから玄関で待て！　裸足なんだから床が汚れる！」

「むー、ほんとに……」

「それはこっちのセリフだよ……」

なぜか二人ともため息をつきながら、私は玄関を上がって脱衣所へと向かった。

……まぁ、結果から言えばそういうこと。結局あのままグダグダな流れで彼女を我が家に連れてくることになった。

そもそもあそこで雨の中置いていくなんて真似は、倫理的にも社会的にもできるはずがなかった。それらを無視できる程度の悟りを高校一年生に求めるのは酷だというものだ。

一応あいつの身元について聞いてみたが、

「実は何にも分からないのだ。名前も何も」

なんていう斜め上の答えだった。俗にいう記憶喪失なんだろうけ

れど勿論実際に見るのは初めてだ。
　雨の中でどう見ても日本人とは思えない記憶喪失の少女と出会って、これから何かの物語が始まる……なんてね。いくら私の名前が主人公っぽいって言ってもそんなことがあるわけない。
　ともかく、このままじゃ彼女のことをなんて呼べばいいのかわからない。便宜的にも呼び名は必要だろうからちょっと考えてみようかななんて思いつつ。
「なゆたー！　一緒にお風呂に入るぞ！」
　さてそんなわけで、この生意気な少女はまるで我が家だとでもいうようなふてぶてしさで私を誘ってきていた。
「ん？　どうしたのだ？」
「あのさぁ……まぁいいや。とりあえず風呂なんて入れてないからな。シャワー浴びるだけになるぞ。あと私は後で一人で浴びるから先にお前一人で浴びてて」
「むー……」
　何故か彼女は頬を膨らませているが、まぁ知ったこっちゃない。風呂場の広さから言って二人で入るのも窮屈ではないだろうけど、私は一人で浴びていたい。服の上からタオルで体拭くぐらいの事はしたし、とりあえず自分の部屋に……。
「むーっ！　むーっ！」
「っておい！」
　言葉にならない言葉を発しながらそいつは私の手首を引っ張ってきた。いやそれはいいものの、やけに力が強い。私は水泳部員で体力は同学年の中だとそれなりにある方だと思ってたのに、そんなのはお構いなしというくらいに引きずられていき、
　風呂場に連れてかれた。
　途中で壁とかを頑張って掴んでいたんだが、それさえも無意味だったという。

「シャワーだシャワーだ！」
「おい待て！　私もお前も服着て――」
――ぶわっ！　冷たっ！
私の制止も聞かず、無情にも蛇口はひねられ、さっき体を拭いたのもすべて無駄だったといわんばかりに私たちは濡れ鼠になってしまった。

第3話　続・シャワー

水が降り注ぐ。濡れる。濡れる。濡れる。
そうしてたちまち濡れ鼠になってしまった。衣服が張り付いて気持ち悪い。それも、さっきの雨の時より更にだ。ジャージが水を吸ってやけに重たい。
ようやく気が戻った私は、とりあえずシャワーの水を止めておく。それから重くなった右腕を持ち上げ、私をよくも風呂場に引きずり込んでくれた張本人の胸ぐらを掴んだ。
「なにするんだ！」
それに少女は両手を挙げ、アニメ声をきんきんに張り上げて抗議した。
「それはこっちが言うことだ！　いきなり何するんだよ！」
「なゆたが一緒に入ってくれないからだろ！」
「そんなの逆ギレじゃないか！」
「そうだ逆ギレだ！」
いやだから堂々と逆ギレするなって！　ただ認めて堂々としてればいいってわけじゃないから！　別にそのために指摘したわけじゃないしさ！
「私はたったひとりだけど……いや、だからこそ他人の温もりが欲しいのだ。そういう星のもとに生まれてきたはかない命なのだ……」
そして急に声をしぼめてそう訴える少女。そうか、それは悪かった……
「いや思わず納得しかけたけどないだろ！」
全然はかなくないし！　まずこれを温もりとは言わない！　冷水だぞ冷水！
「しかしこれはしょうがないな……よし、一緒に入るぞ」
「……ああ」
やむを得ず私は首肯した。だが、しょうがないなどとこいつが言

える立場じゃないような気がするんだがどうだろう。
「とりあえず私は着替えを持ってくる……」
「むーっ！」
「……わかったよ」
ついさっきの事もあるし、こいつは一体何をしでかすかわからない。下手に刺激させないほうがよかった。着替えなんて後でいいや。どうせ他に誰もいない。
「待て、どこに行くんだ！」
風呂の扉を開けて脱衣所に向けて歩き出すと、後ろからそんな問いが聞こえてきた。「ああ？」と振り返って私は答える。
「脱ぐだけだよ。服着たままシャワーなんて浴びれるか」
そうして扉を閉じ、ジャージを脱いで洗濯機に放り込んでいく。少女は（多分）頬を膨らませていたが「いい加減にしないと放り出すぞ」と脅して黙らせた。
ちなみに私はそんなに人に裸は見せたくない。相手が女ならいいかと言ったらそういうわけじゃないわけで。あと確かに水泳部でいつも水着姿だったりはするけど、それも全く別次元の話だ。
今回はまあ仕方ない。あいつを冷たくあしらってやる理由もないだろう――頭がおかしくなってるだろうってのもあるし。
「うわ、張り付いてるし……気持ち悪い……」
背中に手を回しブラジャーのホックを外しながら、私は呻いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8913t/

我が家には正体不明の生物がいる

2011年11月7日12時04分発行